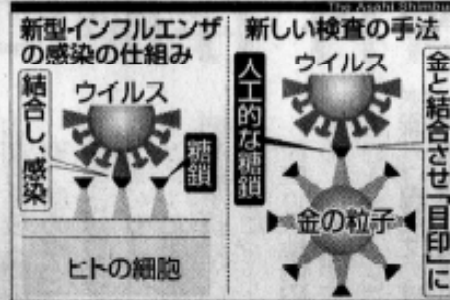


新インフル 発症前に判別

兵庫医大で試験運用へ

新型インフルエンザのウイルスがヒトに感染する仕組みを逆手に取り、従来の10万倍以上の感度でウイルスを検出できる手法を、鹿児島大の隅田泰生教授らの研究グループが開発した。発症前でも感染を確認でき、早期治療で重症化を防げると期待されている。近く、検査機器の試験運用を兵庫医科大で始める方針。新型インフルに感染しているかど



ウイルス検査短縮 半日→30分

うかは、まずは簡易検査キットを使い、その後ウイルスの遺伝子を増幅させるPCR検査で確定する。しかし、感染の初期段階では「陰性」と診断されるという問題がある。

着目したのは、ウイルスがヒトの細胞の表面にある「糖鎖」にくっつき、感染する仕組み。人工的に作った糖鎖を小さな金の粒子の表面に取り付け、患者の唾液と混ぜて遠心分離させたところ、重量がある金粒子とくっついたウイルスを高い濃度で分離、取り出すことができた。鼻の奥から検体をとる従来の手法は痛みを伴うが、唾液を使うので負担も減る。

研究グループは検査機器を兵庫県内のメーカーと共同開発中。新型と確定するまでに現在は、PCR検査を含め半日かかっているが、新手法では30分ほどに短縮できるといっている。年内にも兵庫医大で試験運用を始める。

(白井伸洋)